

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第30回 今の教育と昔の教育の違いから学ぶこと

ある日ネットを覗いていたら、日経B.Pの記事が目にとまった。「課長塾」という言葉だった。現役時代、人事部に所属して、採用や社員研修を行ってきたものとして部下の育成には相当力を入

## 現代はトーナメント方式

れていた。無意識に反応してしまう自分がいることに驚きながら申込書を出してしまった。

場所は広島市内のホテル。がんサロン仲間と2人で出かけて行った。参加者は150名以上。私が最高齢だろうか。皆さん若い。30代が大半だろうか。

新しくリーダーとなって部下指導に難儀している姿が見て取れた。こんなに部下の育成に困惑している若者が多いとは思いもしなかったことだった。最近自分たちのスキルアップ研修の多さが目につくが、部下を育てることの大切さこそ、これからの社会を作って行くベースになるのではないだろうか。

2部構成で1部は部下の指導法についての講義、2部はJALのCAによるセルフ・マネジメントについてのトークだった。自分の若かりし時代を振り返ると、最近の社員教育は非常に難しい。当時はしごいて、しごいて、育てることが普通だったが最近違う。怒ると辞める。ひ弱な人材しかないからだ。学校教育に問題があるからだろう。

今の学校教育は仲良しクラブ。お互いをかばい合いながら進んでいる。今の社会は特に生存競争が激しい。蹴落とすか、蹴落とされるかの真剣勝負の場が多い。偉くなりたいが上に立てる者は全体の一部。それまでには沢山の競争を生き抜かねばならない。

沢山の収入を望むなら、上に立つしかない。試練の連続がその地位を勝ち取るのだろう。今はそんな厳しさに耐えられない若者があまりに多い。都会は価値観の違う人達の集まる場所。だから相手の考えを認めることからスタートする。さらに自己主張が出来なければ生きていけない。現代はトーナメント方式がまかり通っている。それを勝ち抜かなければ勝利は見えてこない。そんな社会をどう生き抜けるだろうか。

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライブイングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第31回 主治医を変えると言うこと

退院後、初めての外来診療の日、トラブルは起こった。主治医とわたしの見解の違いから起こった出来事だった。わたしの糖尿病での症状は以下の通り。

日に4回のインシュリン

## 自分の命は自分で守る

注射を行い、打っている単位は朝38単位、昼20単位、夕20単位、寝る前16単位(別の薬)、計94単位。普通では考えられない単位を打っている。

入院した際、急激に単位数が増えた。これは私自身の不養生によるものだろう。入院時にはきちんと血糖測定し、インシュリンを打っていた。数値にバラツキがみられたからだ。時には300を超え、時には100を切ってしまう。相当なばらつきなのだ。退院後もその傾向は変わらない。だからきちんと測定して、打つのを心がけたかった。

それにもかかわらず主治医は測定器具を少しし

か処方しなかった。1日に4回インシュリンを打つのに、測定は1日2回ほど。数値の変動があるので心配だから、毎回測定したいと言ったが受け入れてくれなかった。国で決められたことだと主治医は言った。

測定用の諸器具は院内で処方される。つまり退院後は計測せずにインシュリンを打てということか。入院時には毎回きちんと測定していたのに、退院したらいい加減に打てということなのか。

これはおかしなことだと直感した。厚生労働省の担当課に電話した。担当者によれば、規定は主治医の言った通りだが、但し書きがあるとのこと

と。つまり「場合によりその数量を超えることも可なり」ということだ。

早速主治医に申し入れたが、はっきりとした返事はなかった。

患者は医師にのちを預けている。それなのに簡単に人を診てもらったら困る。そこで入院していた時、主治医だった医師に担当を変更してほしいと申し入れた。多少強引だったかもしれないが、自分のいのちは自分で守らなければ誰が守ってくれるのだろうか。それ

以来、新しい主治医とは楽しく真剣に討議しながら治療を続けている。場合によってはこのような決断も患者はしなければならないと思う。

## 患者が変われば医療が変わる 医療が変われば地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第32回 がん治療学会学術集會に招かれて

今年10月、横浜で開催された学術集會にPALメンバーとして招かれた。これまで4〜5回ほど参加しただろうか。規模の大きな集會で、1万人以上が来場。会場は医療者で満員だ。がん患者の私たちにもブースを与えられた。このように学

## 医療者と患者、腹割って話す場を

集會が患者にスペースを提供して、お互いが一緒に学び合う姿勢はうなずける。さらにステップアップしてほしい。

ノーベル賞を受賞された大隅典先生の講演を聞くチャンスも頂いた。さすがノーベル賞受賞者。凡人の私たちの及ぶところではないのを痛感した。講義はまったく理解出来なかった。それもそうだろう。ノーベル賞を受賞される方なのだから私たちには理解できないのが当たり前はず。大勢の知り合いの先生方との出会い、また新しい先生との出会いがあり、有意義な時間を過ごすことができた。学ぶことも多く、あたらしい情報を得て視察したい施設も沢山あった。帰ってからもこの成果をどう生かすかだろう。

反面ゆっくりとした時間もほしかった。なにか追われ過ぎていた感じ。見たいブースも沢山あったが時間が無いし、会場が広くて移動が大変。移動に10分以上費やすところもある。ポスターセッションはあったが、医療関係者の見学がもっと欲しかった。せつかくのチャンスなのだから医療者にも患者の活動を目にしてほしい。

ば今後の医療の進化は無い。それが残念。

もうひとつ残念なのは展示ブースを覗けなかったことだった。数年前、参加したときは自由に参加できたのに法律の壁があるらしい。患者とメーカーが本音で話しが出来るかもっと素晴らしい薬の開発ができると思う。全国には各種学会、研究集會は沢山あるが、患者に開かれた集會は少ない。がん治療学会は数年前から患者セッションを設けて参加する患者に助成もしている。有りがたいことだ。どの学会、研究会ももっと患者ファーストになってほしい。それが今後の医療の発展を向上させる力となるだろう。

## 患者が変われば医療が変わる 医療が変われば地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第33回 がんどころではないということ

新しい年、2017年を迎えた。今年80歳を迎える。最近「がんどころではない」ということをよく言っている自分がいる。12年前にがんの手術をして臓器を2つ取り、死を覚悟した時もあった。6年前、糖尿病となり血糖値が500を超え

## 病氣抱えても東奔西走

検査入院を2度行った。2年前、心筋梗塞になり、急患で病院に飛び込みステントを入れた。2度の入院で爆弾を抱えているようだ。1度目は大分で開催された死の臨床研究会に参加して家に帰った時。2度目は富山の市民公開講座に呼ばれて家に帰ってきた時だった。いずれも家に帰ってきた後だったことが幸いした。それ以来、がんどころでは無くなってきた。がんによる死は突然やってくる。心筋梗塞はがんとは違い、死は突然やってくる場合が多い。従って内科、循環器の定期検査は毎月欠かさず行っているが、がんをあまり意識しなくなってきた。2年前、心筋梗塞になり、急患で病院に飛び込みステントを入れた。2度の入院で爆弾を抱えているようだ。1度目は大分で開催された死の臨床研究会に参加して家に帰った時。2度目は富山の市民公開講座に呼ばれて家に帰ってきた時だった。いずれも家に帰ってきた後だったことが幸いした。それ以来、がんどころでは無くなってきた。がんによる死は突然やってくる。心筋梗塞はがんとは違い、死は突然やってくる場合が多い。従って内科、循環器の定期検査は毎月欠かさず行っているが、がんをあまり意識しなくなってきた。

きいている自分が居る。にも拘らず昨年12月、輪島、金沢、福井に行ってきた。「終末期安心して住める街作り」事業で益田市社会福祉協議会から助成を受けたからだ。輪島市は「みんなの保健室」が開催している事業の視察。がんサロン、認知症Cafe、介護・健康相談などを同じ場所で開催している。金沢市は「元ちゃんハウス」の視察。マジーズハウスを真似た癒しの場。素敵な空間を作り出していた。患者にとって、このような場があれば、いかほど心が癒されることか。

今月1月は、姫路市だ。どうクリニックサロン見学。大頭先生はがんサロン、遺族サロン、絵手紙コーナーなど、沢山の患者支援をしている。西宮市夙川の藤川先生が主宰するがんサロンも見学。自宅を開放したがんサロンで、全国初の取り組みではないか。

さらに1月末、FFJ CP全国大会が東京秋葉原で開催される。2月は久留米市で開催の日本ホスピス在宅ケア研究会に参加予定。

患者も忙しい。懲りもせずはまだ動く。病気になるに「いい加減にしない」といつも注意されているが止めない。自分にとってこれが「生きる力」となっているのかもしれないから。

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

### 第34回 癒しを求めて

2016年12月金沢の「元ちゃんハウス」、2017年1月東京のマグイズ東京を見て回る機会があった。両方とも最先端の癒しの場でそれぞれ特徴があり素晴らしかった。その感想を書いてみたい。

まず金沢の元ちゃんハ

## オープンスペースが癒しの空間に

ウス。西村先生ご夫妻、スタッフのみなさん方が迎えて頂いた。金沢出身の私にとっては数年ぶりの訪問であった。金沢大M先生とその場で落ち合った。元ちゃんハウスの場所は兼六園の近くの高台にあり、偶然にも私が通っていた中学校の真ん前であったので懐かしさは倍増。4階建てのビル全てを使い、2Fが主たるいやしのスペースだった。家具はすべて木製で、広い畳のスペースあり、ソファもあり、気を休めるには最高の場所。オープンキッチンが備えてあり、台所のテーブルでお茶を飲みながらの談笑となった。

元ちゃんハウスを作るきっかけとなったのは、西村先生ご自身ががんを患って患者の気持ちが分かり、患者にはこのような癒しの場が必要と感じられ募金を集められての開設と聞いた。地元の協力もあってらしい。

マグイズ東京はもっと規模が大きい。ゆりかもめ市場前駅から徒歩5分程度の場所。近くには運河があり、遠くには高層ビルや東京タワーも臨める。福井大学S先生、T先生とご一緒の視察となった。

平屋建て2棟が渡り廊下で結ばれている。入ってすぐに1枚板の大きなテーブルがあり、その場が主たる面談の場になっていた。横には大きなオープンキッチンがあり、お茶を飲みながら談笑出来る場であった。その他いろいろな形の部屋があり安心して居られる空間だった。

2件ともオープンキッチンが主たる場を占めている。平素島根にいると海が見えて、山が見えて、風光明媚なのだが、マグイズ東京では違った感覚を私に見せてくれた。高層ビルや東京タワーといった遠くに視点を合わせる目標物があるとそこに視点を合わせるが、目標物がないとただ漫然と遠くを覗いているにすぎない。視点を合わせる事が、心に残るか残らないかの差となるのだろう。

